

河西千秋 著



自殺予防学

新潮社 新潮選書
2009年6月発行
本体価格1,100円

日本の自殺者の数が3万人ということ
は、新聞報道などでも聞かれるが、一日に
80人から90人と示されると、その数の重み
を改めて感じる。一つの市が消失する数で
あり、自殺率は先進国の中で最悪という。
精神科医の著者は「戦時でもない国で
(略)まさに異常事態」と危機感を表明す
る。本書は自殺について国際比較などの数
値や自殺に至る心理、社会の背景、精神疾
患とのかかわり、課題とともにその対策に
ついて実証的に示されている。

11年連続して3万人を超えているとい
う
それほどの数の自殺者がいるにもかかわらず
ず、この国の取り組みは遅れている。著者
の言うように自殺が過小評価されているの
だ。取り組みが遅れていることにはいくつ
もの理由が潜んでいるが、一つにはうつ病
をはじめとした精神疾患に対する認識、受
診が十分ではないこと、社会として自殺防
止に対する強い姿勢、メッセージが打ち出
せていないことがあるように思う。地域の
取り組みとしては自治体の首長の意思が重
要であるにもかかわらず、幾つかの自治体
は別として総じて消極的である。センセー
ショナルな報道が自殺を誘発するのではな
いかと著者も危惧するが、メディアも「い
じめ」による自殺や「介護による無理心
中、自殺」を大きく取り上げて、その次

に「自殺してはいけない」というメッセー
ジは、出せないでいるよう。

というのも、「もともと日本は自殺の多
い国」だったと著者は指摘する。バブル経
済を謳歌していたときでも、自殺者は多
かった。しかも、「曾根崎心中」ではない
が心中という自殺(殺人でもあるが)、「詰
め腹を切らされる」「政治的な自殺行為」
のように日本の文化に自殺は、案外溶け込
んでいるという。本書では触れられていな
いが、キリスト教文化をはじめとする宗教
的なバックボーンの強弱というのもあるだ
ろう。日本が自殺を容認する文化があるの
かもしれないが、もとより、それでよしと
しているものではない。

「自殺する権利」ということに対して、
著者はこういう。「冷静な自殺などとい
ものはほとんどないのである。権利云々は
当事者がきちんと判断できる状態にあるの
を前提に初めて議論できること」と。自殺
に傾く人たちは、精神的に追い詰められて
いる。死への思いと助けてほしいという両
面、助けを求めるサインを出しているのだ。
本書は今できることは何か、という著
者の強い思いから生み出されており、地域
での住民調査や紙芝居などに足の着いた
啓発活動で成果を挙げている取り組みなど
も紹介している。本書を読み終えて評者は

個人的には「自死」という言葉は、使うま
いと思った。自ら死を選ぶ、のではなく、
自分を殺すという「自殺」という言葉を使
い続けることで、それを食い止めるにはど

うしたらいいのか、社会の中で孤立しない
で生きていくためのあり方を考え続けたい
と思う。

先ほど案内した『自殺予防学』は自殺を予
防する担い手として「すべての地域住民の
気づきと見守り」をあげていた。地域の人
の理解ある目が自殺を防ぐということだ。

本書『このまちで、ともに暮らそう』
は、自殺予防のみを意図したわけではない
が、「地域」と「住民(あるいは市民)」を
キーワードに、地域が持っている力で、地
域を支えていくことを企図して構成されて
いるという点で、あながち前書と無縁では
ない。実は本書を企画した一人が評者であ
り、そのためここで紹介することにためら
いはあった。しかし、本欄もこれで最終回
である。終えるに当たって、今一度、隣近
所、民生委員、交番、小中学校、コンビ
ニ、PTA、町内会さまざまな地域の力を
もう一度集めて、自分たちの地域で今必要
なことに着手してほしいという思いがあ
り、発行元の了解を得て取り上げるに至っ
た。

NPO法人、生協を母体とする福祉施設の
責任者、福祉行政に携わる方々や、福祉関
係団体の最前線にいる方々などが立場を超
えて集まり、介護保険や福祉施策だけでは
安心して過ごせない現状の打開策について
話し合ってきた。コミュニティが崩壊して
いるのではないかと、そうした危機感から
集まりだした。その後閉鎖空間での議論で
はなく、原稿化し問いかけたいとまとめた
ものである。

本書は3章で構成され、1章は勉強会の
うち5人のメンバーによる議論を座談会と
いう形で収録した。2章は「地域における
コミュニティのあり方」とし、1章を整理
し、俯瞰している。3章は先進事例である
が、本書の軸となるのは、80ページにも
ぼる座談会であろう。セーフティネットの
危機を共通の問題意識としつつも、担い手
の捉え方など議論は白熱している。地域の
あり方を提示するのではなく、地域を考
える呼び水として読んでもらいたい。

もともと本書は5年ほど行っていた勉強
会での議論の結集ともいえるものである。



このまちで、 ともに暮らそう

新たなセーフティネットづくりをめざして

筒井書房
2009年3月発行
本体価格2,400円

21世紀型地域福祉システム研究会

編著

Hiroko Higashihata

福祉ジャーナリスト・社会福祉士(新宿区社会福祉士会会長)
国際医療福祉大学大学院博士課程修了(医療福祉経営学博士)
主著:「介護保険制度における福祉用具貸与事業」2006年、中央法規、
「介護保険で利用できる福祉用具」2008年11月、岩波書店など。